4. 東京大学スキー山岳部

－山の厳しさと愛しさを知る－

松高を卒業後、東京帝国大学法学部に進学します。当然のようにスキー山岳部に入部し、国内各地の峻峰を登りました。

1948年の南アルプス赤石岳の冬季合宿では部員が遭難死し、小谷自身も命の危機を感じるような体験をします。このことは、後の海外の高峰遠征において、安全を第一として、無理をしない登山をめざすキッカケになりました。

ここに注目！

「アルペストリアン 第6、7、8号」

森本次男の依頼で母校の後身校の山岳部部報に、英国登山家のF.Sスマイスの著した『THE ADVENTURES OF A MOUNTAINEER』（「一登山者の冒険」）の翻訳を掲載した。この本では登山の意義や心構えを説いており、小谷の愛読書であった。森本次男らが培った「北山スクール」の後輩たちに送るエールでもある。

第7号では自身の随筆「ある秋の單独行」を掲載している。 登山家であり、著述家でもあるスマイスと小谷の文筆活動の姿が重なる作品である。

「日記」、「山日記」

1946年～1949年及び1951年～1953年までの山行記録までの山行記録。赤石岳冬季合宿についても時間まで詳細に記している。のちの海外遠征時でもこのような詳細な記録を付けている。

―山の厳しさと愛しさを知る―

涸沢合宿　1949年8月3日～4日
恩師森本先生と滝谷を登攀

前穂高岳山頂にて一服

1947年4月～1950年3月　東京大学法学部に在籍

安田講堂前

下宿にて勉強中

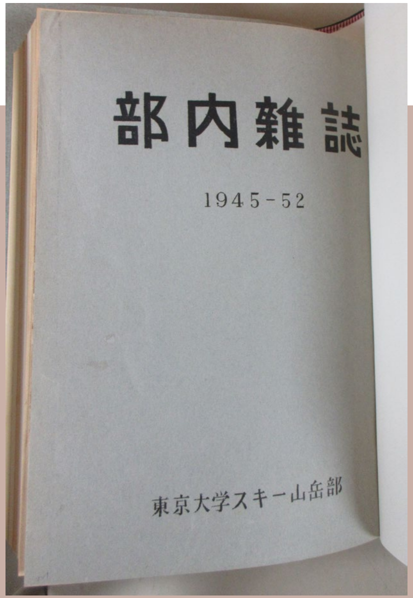
前穂高岳　3,090m　北尾根（1949年撮影）
写真（小谷隆一アルバムより）　小谷達雄氏　蔵

展示資料No.19

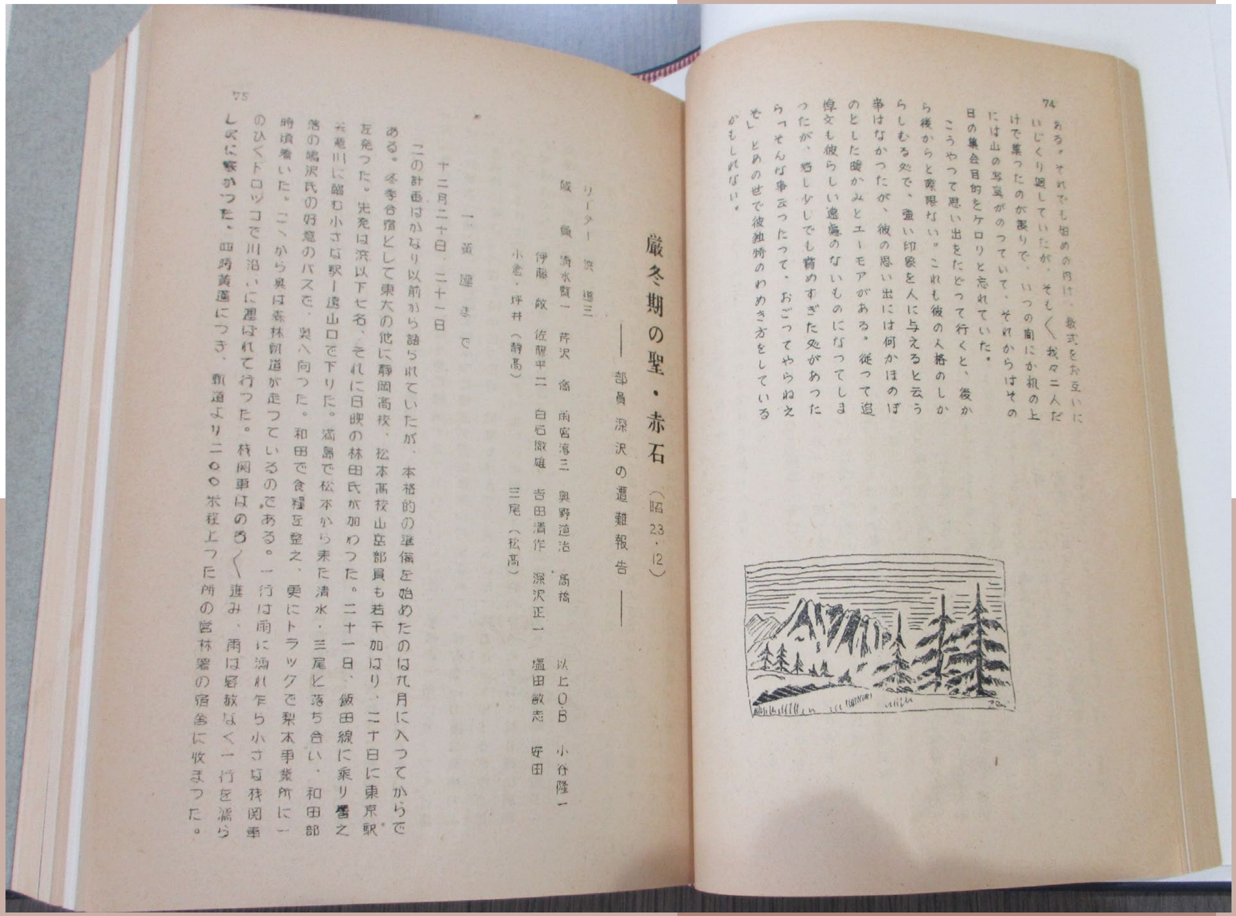
『部内雑誌』
1945-52

東京大学スキー山岳部
1954年2月16日発行

（小谷コレクション）



『部内雑誌』 1945-52 記事
「厳冬期の聖・赤石（昭23.12）」
― 部員深沢の遭難報告 ―



『山なみ帖』「冬山の帰途」1950.2
のモチーフとなった山行記録（1948年）

戦後途絶えていた部報を1954年に復刊した。1948～1949年の部事情について小谷が寄稿している。
資料は1962年までの部内雑誌を小谷が合本したもの。各巻末には部員名簿が記されている。

赤石岳冬季合宿 （1948年12月20日～1949年1月5日）

総員17名
OB5名、部員7名、松本高校1名、静岡高校2名

赤石岳アタック隊 … 深沢 を含め4名
聖岳アタック隊 … 小谷 ほか3名

12月29日 部員深沢の遭難（赤石岳直下の凍結斜面で滑落死）

1948年12月29日（快晴） 聖兎のコル付近より聖岳遠望

29日は快晴に恵まれ、午後から聖岳に向けて出発。兎岳と聖岳の鞍部に第4キャンプを設けて泊まった。
翌早朝に遭難の連絡隊が到着し、全員直ちに引き返して遺体収容の対応にあたることとなった。
元旦からは猛吹雪に襲われる。第3キャンプのテントが飛ばされ、過酷なビバークを余儀なくされた。このとき、小谷自身も生命の危機を感じたと記している。

1949年5月22日から29日に赤石岳遺体収容行（一次）に参加
25日から27日に百間洞の小屋に入って終了作業を行うが、積雪多量の為、（作業続行）不可能であった。再び後日に残して下山する。
赤石岳遺体収容行（二次）は7月であった。（小谷は不参加）

『部内雑誌』 1945-52 記事より抜粋要約

部員深沢遭難（1948年）をモチーフとした作品
『山なみ帖』「冬山の帰途」　1950.2

『山なみ帖』より

冬山の帰途

二十日間の冬山合宿を終えた私は友人達と別れ、ただ一人淋しい夜の小駅から汽車に乗り込んだ。車内に入ると電燈の光が目にまぶしく輝き、臭い酒気が鼻をつく。月日の観念が失なわれてしまう冬山生活を送っている間に、都会にはもう新しい年がやってきたのだ。乗客の服装も正月らしい華やかな色に彩られている。

私は車内の一隅に空席を見つけ、棚の上にはのりそうもない大きなルックザックを座席の横におき、ピッケルを前にたてて腰をおろした。乗客の大半は快さそうに眠っている。大きく揺れて動き出した列車がやがて一つ調子の音をたて始めると、私も漸くくつろぎを覚えることができ、不幸だった冬山の生活の想いが脳裏に蘇ってくる。

（中略）

私達は冬山の敗亡者だった。登頂寸前にA岳直下で岳友Fは墜死し、しかもその直後激しい吹雪が数日間続き、Sと二人でとどまっていた前進キャンプのテントは烈風のために破壊されてしまった。難を避けて雪洞をつくったが、これも吹雪のためにこわされ私自身死地に追いこまれたのだった。

Fの笑顔が大きく浮んでくる。どうしてスリップしたのだ、と空しい問いをFの笑顔に向って口ずさむ。しかし、Fの顔はいつものように微笑しているばかりだ。装備の不充分、技術の未熟等パーティとしての責任が次から次へと数えられて私を責めるが、Fは既にA岳の山腹に新雪に抱かれて眠っている。取返しのつかない厳然とした事実なのだ。

（中略）

故郷の雪の北山が私の真正面にほのかにながめられるようになってきた。身体の疲労が回復したら北山へスキーに出かけよう。〈僕はまた山に登り続けるよ〉と、瞼を離れないFの顔にささやくと、Fは相変らずの微笑をもって答えた。私はFに心からの合掌を捧げた。

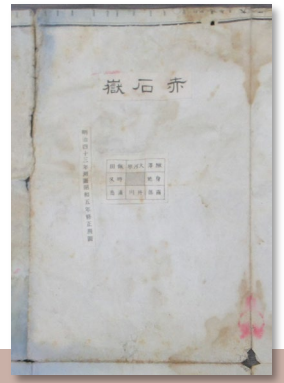
（後略）

（一九五〇・二）

展示資料No.20

国土地理院
五万分の一地形図
「赤石嶽」

（小谷コレクション）



明治四十三年測図
昭和五年修正測図

実際に使用した地図

猛吹雪に遭う等の為、他の山行の地図に比べて汚損が著しい。

ルート及び△ＣⅠ、△ＣⅡ、△ＣⅢ（2500m附近）の各キャンプ地が赤ペンで書き込まれている。

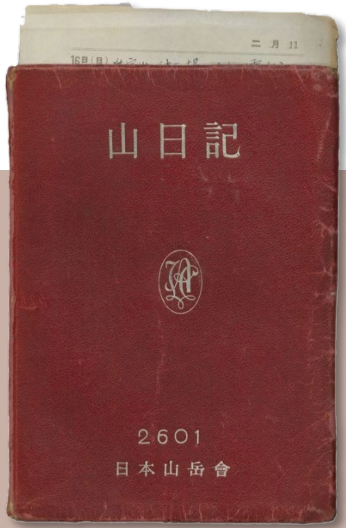
このルートは南アルプスの核心部に最短時間で到達するために、新しく開拓したもの。

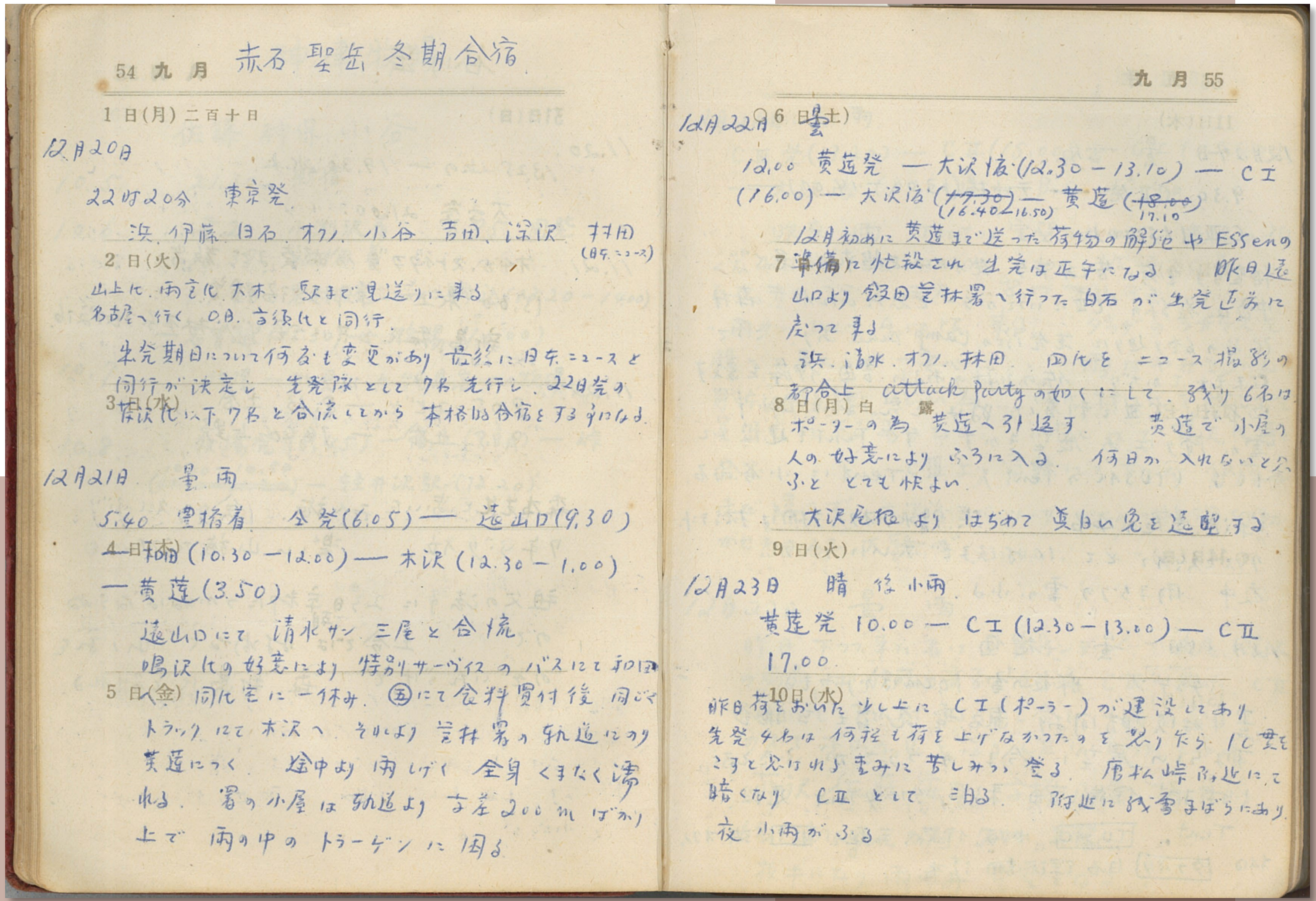
展示資料No.21

『山日記』

2601
日本山岳会
三省堂
1940年12月発行

小谷達雄氏 蔵





第二商業学校時に購入、使用していた山日記に1946年～1949年までの山行記録を追記している。

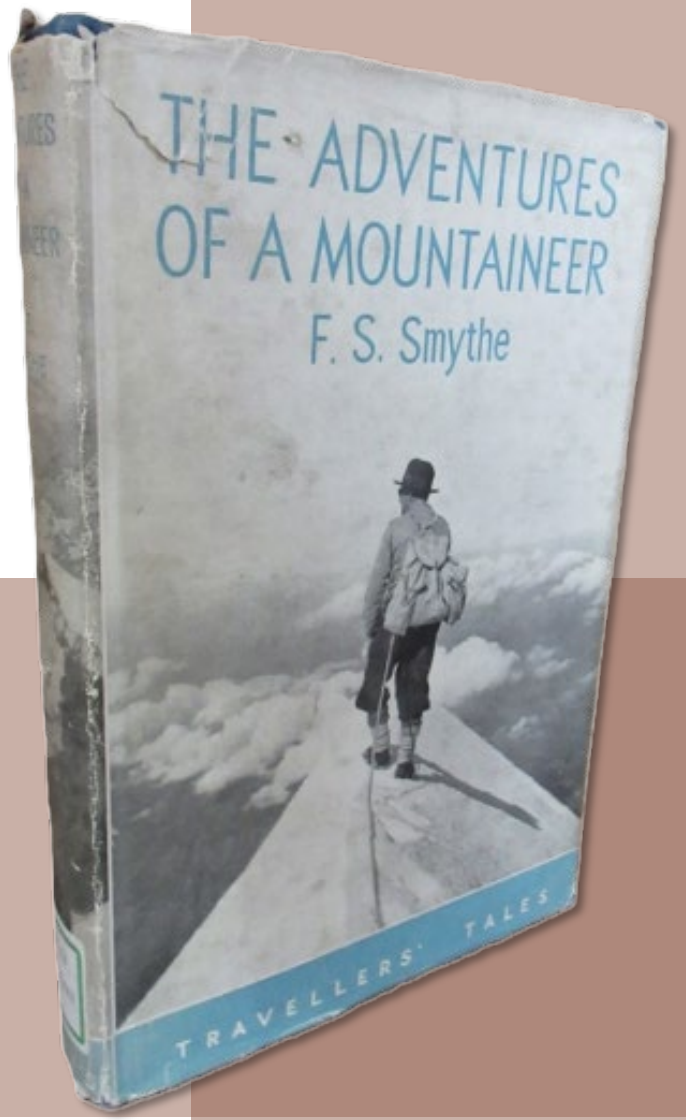
特に、赤石聖岳冬期合宿は克明に記述されている。

展示資料No.22

『THE ADVENTURES OF A MOUNTAINEER』

F.S.Smythe
J.M.Dent 1940

（小谷コレクション）



このような私が登山の意義を考える時に、まず思い出すのは高校時代に読んだF.スマイスの『一登山家の冒険』という書物の一節である。スマイスは登山の意義、或いは価値づけを三つあげている。第一に登山は何にもかえがたい友情を得させてくれる、第二に大自然の中で行う運動であるための効果、第三に人間の本能である冒険心を満足させてくれるものであると。

『山なみ帖』「登山とは」（1966.7）より

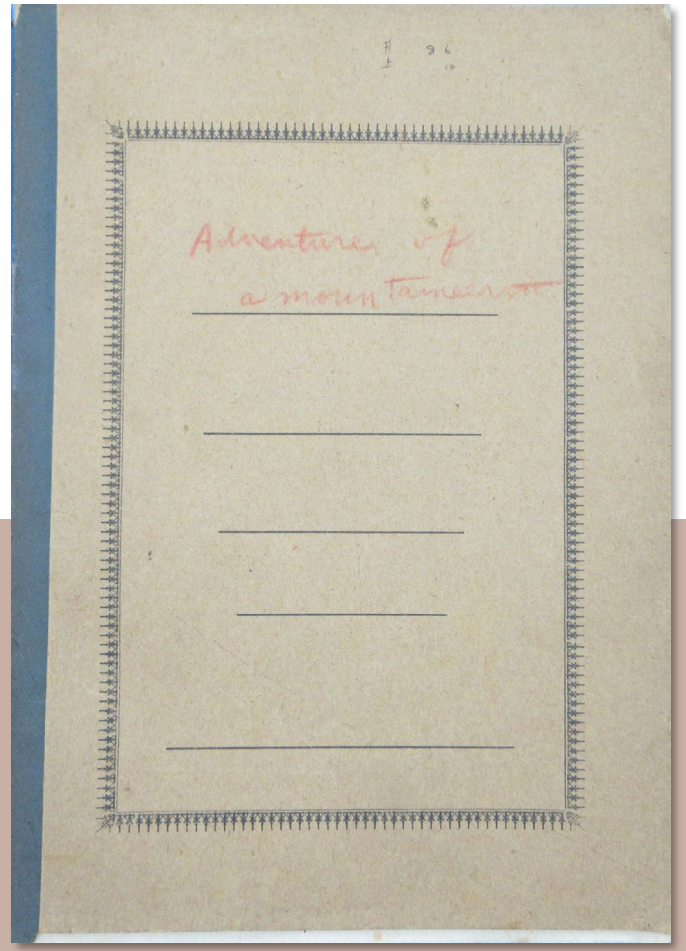
※『山なみ帖』では「登山家」、小谷訳文では「登山者」と記載されている。

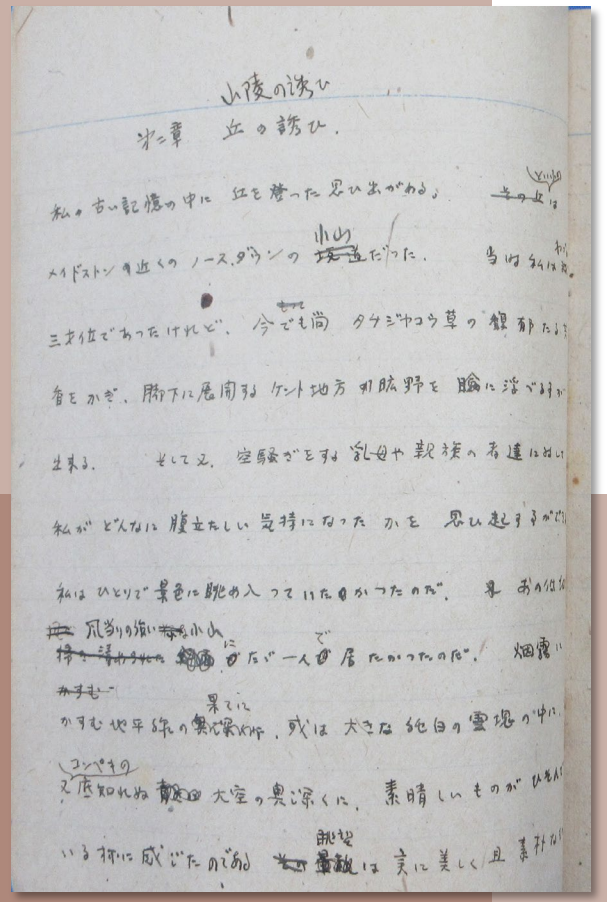
展示資料No.23

大学ノート

「Adventures of a Mountaineer」
同書の翻訳原稿
1948年

（小谷コレクション）





山稜の誘い
第二章　丘の誘い
の頁

東京大学法学部時代の講義ノート（民法）であったが、途中から『The Adventures of A Mountaineer 』Smythe著の翻訳ノートになっている。第2章から第4章までが訳されている。

展示資料No.24

ざ　あるぺすとりあん　きゅう　やまみち　だいろくごう

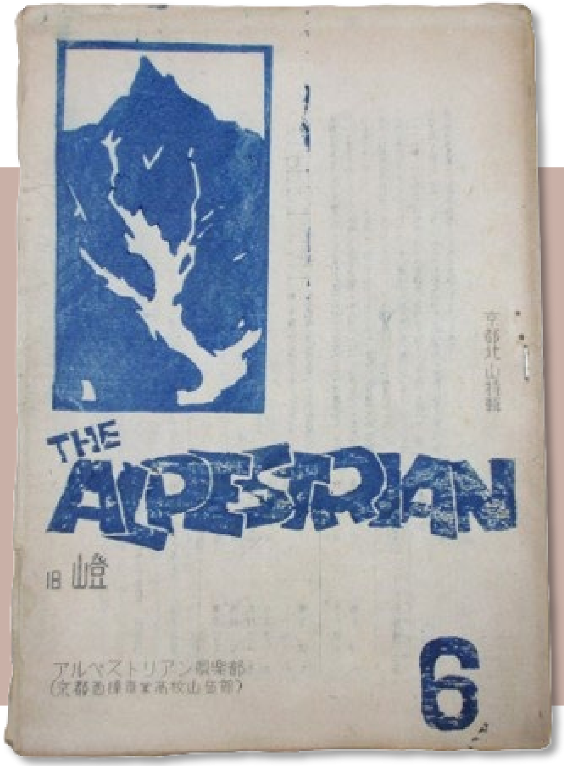
THE ALPESTRIAN 旧 嶝』 第6號

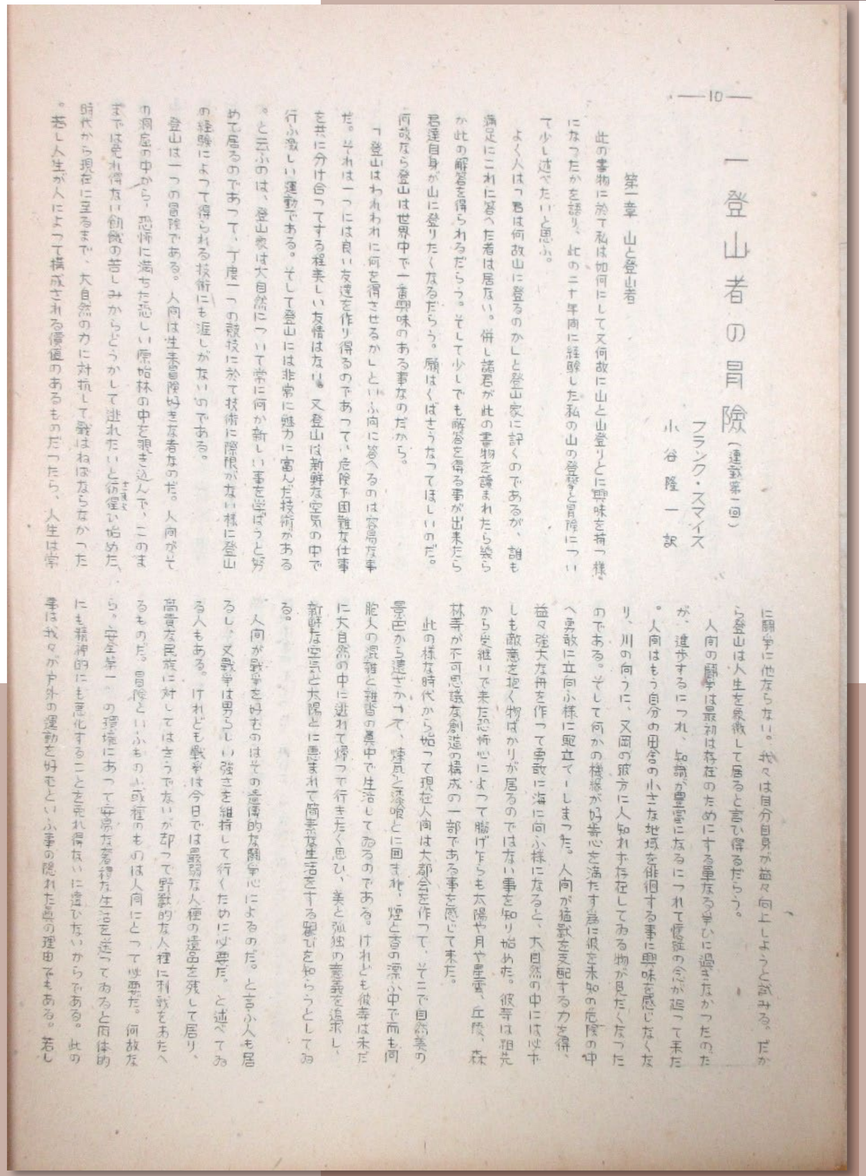
アルペストリアン倶楽部（京都西陣商業高校山岳部）
1948（昭和23）年8月30日刊

（小谷コレクション）

京都西陣商業高校（旧京都市立第二商業学校）の山岳部会報、山岳部顧問は森本次男

収録されている「一登山者の冒険」は二商の恩師である森本次男が連載読み物 として小谷に掲載を依頼した。





—10—

一登山者の冒険（連載第二回）

フランク・スマイス
小谷隆一 訳

第一章 山と登山者

此の書物に於て私は如何にして又何故に山と山登りとに興味を持つ様になつたかを語り、此の二十年間に経験した私の山の登攀と冒険について少し述べたいと思ふ。

よく人は「君は何故山に登るのかし」と登山家に訊くのであるが、誰も満足にこれに答へた者は居ない。併し諸君が此の書物を読まれたら幾らか此の解答を得られるだらう。そして少しでも解答を得る事が出来たら君達自身が山に登りたくなるだらう。願はくばさうなつてほしいのだ。何故なら登山は世界中で一番興味のある事なのだから。

「登山はわれわれに何を得させるかし」といふ向に答へるのは容易な事だ。其れは一つには良い友達を作り得るのであつて、危険や困難な仕事を共に分け合つてする程美しい友情はない。又登山は新鮮な空気の中で行ふ激しい運動である。そして登山には非常に魅力に富んだ技術がある。と云ふのは、登山家は大自然について常に何か新しい事を学ばうと努めて居るのであつて、丁度一つの競技に於て技術に際限がない様に登山の経験によつて得られる技術にも涯しがないのである。

登山は一つの冒険である。人間は生来冒険好きな者なのだ。人間がその洞窟の中から、恐怖に満ちた恐しい原始林の中を覗き込んで、このままでは免れ得ない飢餓の苦しみからどうかして逃れたいと彷徨ひ始めた時代から現在に至るまで、大自然の力に対抗して戦はねばならなかつた。若し人生が人によつて構成される価値のあるものだつたら、人生は常に闘争に他ならない。我々は自分自身が益々向上しようと試みる。だから登山は人生を象徴して居ると言ひ得るだらう。

人間の闘争は最初は存在のためにする単なる争ひに過ぎなかつたのだが、進歩するにつれ、知識が豊富になるにつれて優越の念が起つて来た。人間はもう自分の田舎の小さな地域を徘徊する事に興味を感じなくなり、川の向うに、又岡の彼方に人知れず存在してゐる物が見たくなつたのである。そして何かの機縁が好奇心を満たす為に彼を未知の危険の中へ勇敢に立向ふ様に駆立ててしまつた。人間が猛獣を支配する力を得、益々強大な舟を作つて勇敢に海に向ふ様になると、大自然の中には必ずしも敵意を抱く物ばかりが居るのではない事を知り始めた。彼等は祖先から受継いで来た恐怖心によつて脇げ乍らも太陽や月や星雲、丘陵、森林等が不可思議な創造の構成の一部である事を感じて来た。

此の様な時代から始つて現在人間は大都会を作つて、そこで自然美の景色から遠ざかつて、煉瓦と漆喰とに囲まれ、煙と香の漂ふ中で而も同胞人の混雑と雑沓の真中で生活してゐるのである。けれども彼等は未だに大自然の中に逃れて帰つて行きたく思ひ、美と孤独の意義を追求し、新鮮な空気と太陽とに恵まれて簡素な生活をする歓びを知らうとしてゐる。

人間が戦争を好むのはその遺伝的な闘争心によるのだ。と言ふ人も居るし、又戦争は男らしい強さを維持して行くために必要だ。と述べてゐる人もある。けれども戦争は今日では最弱な人種の遺品を残して居り、高貴な民族に対してはさうでないが却つて野獣的な人種に利戦をあたへるものだ。冒険といふものゝ或種のものは人間にとつて必要だ。何故なら、安全第一 の環境にあつて安易な着相な生活を送つてゐると肉体的にも精神的にも悪化することを免れ得ないに違ひないからである。此の事は我々が戸外の運動を好むといふ事の隠れた真の理由でもある。若し

「一登山者の冒険」 フランク・スマイス著 小谷隆一訳

母校である京都西陣商業高校登山部の会報「アルペストリアン」に掲載された「THE ADVENTURERS OF A MOUNTAINEER」の翻訳

一　登　山　者　の　冒　険　（連載第一回）

フランク・スマイス
小　谷　隆　一　訳

第一章　山と登山者

此の書物に於て私は如何にして又何故に山と山登りとに趣味を持つ様なったかを語り、此の二十年間に経験した私の山の登攀と冒険について少し述べたいと思ふ。

よく人は「君はなぜ山に登るのか」と登山家に訊くのであるが、誰も満足にこれに答へた者は居ない。併し諸君が此の書物を読まれたら幾らか此の解答が得られるだらう。願はくばさうなってほしいのだ。何故なら登山は世界中で一番興味のあることなのだから。

「登山は我々に何を得させるか」といふ問いに答へるのは容易な事だ。それは一つには良い友達を作り得るのであって、危険で困難な仕事を共に分け合ってする程美しい友情はない。又登山は新鮮な空気の中で行ふ激しい運動である。そして登山には非常に魅力に富んだ技術がある。と云ふのは、登山家は大自然について常に何か新しい事を学ぼうと努めて居るのであって、丁度一つの競技に於て技術に際限がない様に登山の経験によって得られる技術にも涯しがないのである。

（後略）

展示資料No.25

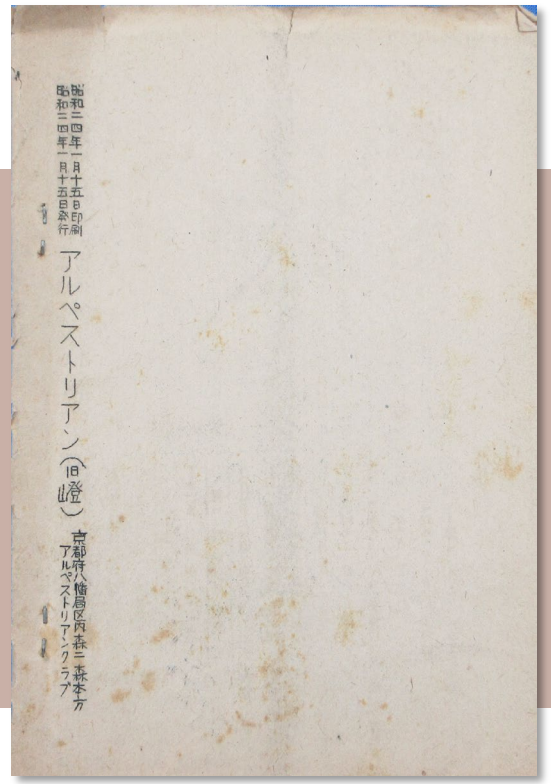
『THE　ALPESTRIAN』７　大台ヶ原特輯

（ざ　あるぺすとりあん　７　おおだいがはらとくしゅう）

アルペストリアンクラブ
1949（昭和24）年1月15日発刊

（小谷コレクション）

京都西陣商業高校が廃校になったことから、「アルペストリアン」は山岳部会報ではなく、一般の会員誌として、森本次男によって続刊された。



『The Alpestrian』7　「ある秋の單独行」

35-38pに収録

『山なみ帖』に同名の掲載文がある。モチーフは同じであるが、
『山なみ帖』では、推敲・加筆され、より洗練された作品になっている。

ある秋の單独行

小谷隆一

山へ私は登つて行かう
そこに小暗き樅の樹そびえ
小川はさゝやき 小鳥はうたひ
雄々しい雲が み空をかける

ハイネの詩を口誦んで気軽に上高地を出て樹林の暗い谷から明るい尾根へと、もうすっかり枯葉で埋められた山径をたどって行った。例年に比べると半月もおそい初霜の下りた晩秋の朝だった。私はひとりで西穂高の岩尾根にとりついた。飛騨側からは吹く烈しい尾根の風は雪の香りを含んで冬の近いことを囁いてゐた。手にふれる岩肌は新雪訪れを待ち受けてゐる様につめたくひえ切ってゐた。

單独行の感傷的淋しさを下の暗い谷間で拭ひ落して来た私は岩を攀ぢて行くに従ひ次第に山の感覚の中へ融け込んで行った。

すべてが孤独である。岩も草も這松も。そしてひとりで行く自分をも含めてこゝには孤独の世界が現出されてゐる。この世界の中に顔をつっこんでゐる私は全く裸の人間だ。裸にされた人間は自然の絶対力の前には何一つ抗する術を持たない。絶対の力を持つ自然がその威力を用ゐたなら、裸の人間はその前に倒れ伏してしまはねばならないだらう。けれども各々の孤独の世界に於いてはじめて自己の真の姿見ることが出来、人間と自然との対決をなし得るのである。“孤独は山になく街にある”などといった哲学者はだれであったらうか。

（後略）

展示資料No.26

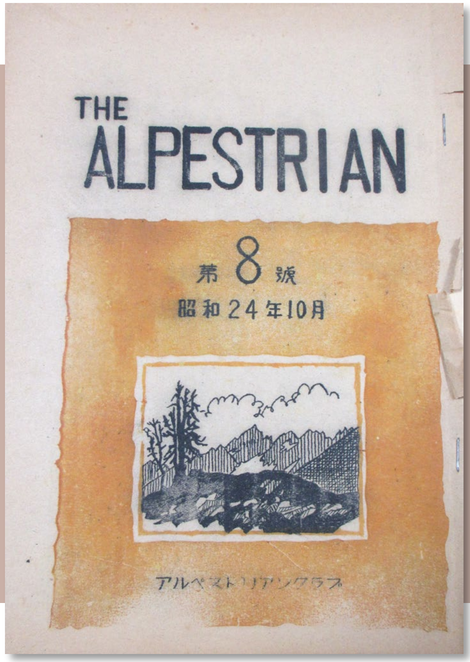
ざ　あるぺすとりあん　だい8ごう

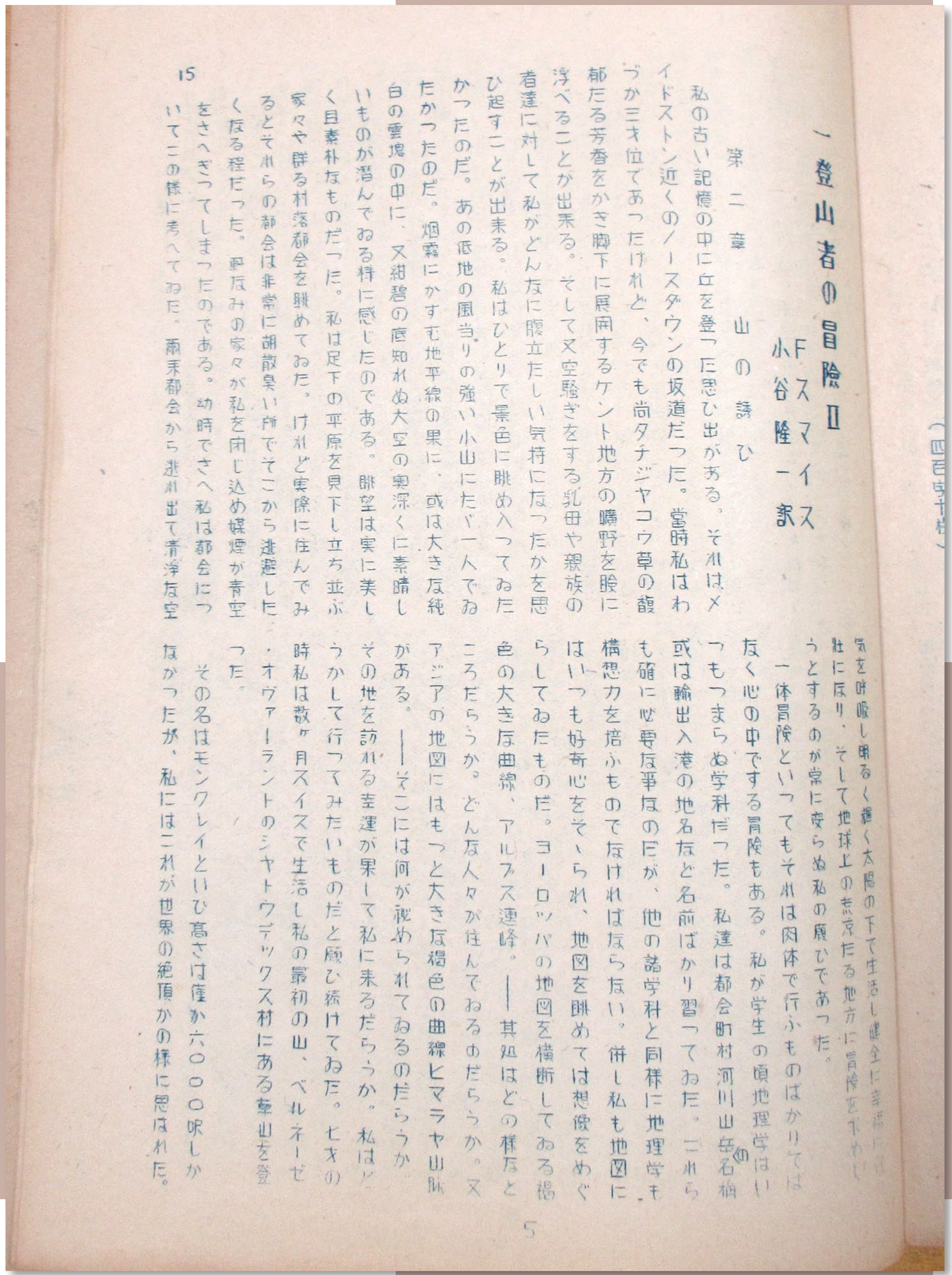
『THE　ALPESTRIAN』　第8號

アルペストリアンクラブ
1949（昭和24）年9月30日刊

（小谷コレクション）

第8号に小谷隆一訳の「一登山者の冒険　II」が掲載されている。





（四百字十枚）

一登山者の冒険 II

F・スマイス
小谷隆一訳

第二章　山の誘ひ

私の古い記憶の中に丘を登つた思ひ出がある。それはメイドストン近くのノースダウンの坂道だつた。當時私はわづか三才位であつたけれど、今でも尚タチジヤコウ草の馥郁たる芳香をかぎ脚下に展開するケント地方の曠野を瞼に浮べることが出来る。そして又空騒ぎをする乳母や親族の者達に対して私がどんなに腹立たしい気持になつたかを思ひ起すことが出来る。私はひとりで景色に眺め入つてゐたかつたのだ。あの低地の風当りの強い小山にたゞ一人でゐたかつたのだ。烟霧にかすむ地平線の果に、或は大きな純白の雲塊の中に、又紺碧の底知れぬ大空の奥深くに素晴しいものが潜んでゐる様に感じたのである。眺望は実に美しく且素朴なものだつた。私は足下の平原を見下し立ち並ぶ家々や群る村落都会を眺めてゐた。けれど実際に住んでみるとそれらの都会は非常に胡散臭い所でそこから逃避したくなる程だつた。軒並みの家々が私を閉じ込め煤煙が青空をさへぎつてしまつたのである。幼時でさへ私は都会についてこの様に考へてゐた。爾来都会から逃れ出て清浄な空気を呼吸し明るく輝く太陽の下で生活し健全に幸福に壮になり、そして地球上の荒涼たる地方に冒険を求めようとするのが常に変らぬ私の願ひであつた。

一体冒険といつてもそれは肉体で行ふものばかりではなく心の中でする冒険もある。私が学生の頃地理学はいつもつまらぬ学科だつた。私達は都会町村河川山岳の名称或は輸出入港の地名など名前ばかり習つてゐた。これらも確に必要な事なのだが、他の諸学科と同様に地理学も構想力を培ふものでなければならない。併し私も地図にはいつも好奇心をそゝられ、地図を眺めては想像をめぐらしてゐたものだ。ヨーロッパの地図を横断してゐる褐色の大きな曲線、アルプス連峰。――其処はどの様なところだらうか。どんな人々が住んでゐるのだらうか。又アジアの地図にはもつと大きな褐色の曲線ヒマラヤ山脈がある。――そこには何が秘められてゐるのだらうか。その地を訪れる幸運が果して私に来るだらうか。私はどうかして行つてみたいものだと願ひ続けてゐた。七才の時私は数ヶ月スイスで生活し私の最初の山、ベルネーゼ・オヴァーラントのシャトウデックス村にある華山を登つた。

その名はモンクレイといひ高さは僅か六〇〇〇呎しかなかつたが、私にはこれが世界の絶頂かの様に思はれた。

15

5